

へんなマラソン見物

今年に入って、ちょっと面白がっているものに「マラソン」がある。大会があると出かけて行く。テレビの放送で一流選手の走りっぷりは眺めていたけれど、ナマの大会に出かけてみる気などこれまでは全然無かったのだけれど、この春から、大通り公園をスタートしたマラソンを含め、洞爺湖、美瑛、千歳などへ行ってみた。

といっても参加するわけではない。スタートやゴールのあたりでうろろうしながら出場者や応援の人を見物するだけの事である。マラソンといっても各地でやっているのは、一流選手が参加するものとは様子が違う。フルマラソン、ハーフマラソンの他、三キロくらいのもことや、親子連れの競技、仮装マラソンなど遊びの要素も少なくない。それぞれ違う色のゼッケンをつけている。スタート前、フルマラソンの人達は真剣で緊張気味だが、最も短い距離を走るゼッケンの人達は、フルに出場する人よりも誇らし気で、はしゃぎ切っている。

どこそこの町の大会は出場者が少なくて賞に入りやすい、とか、完走者に供される記念の物はどこそこの大会が良いとか、自慢気に話しているのは、短い距離の出場者だ。そんな声高な声を聞くとともに聞いているのがけっこう面白いし、奥さんが出場者でご主人が荷物をあずかったり、足のマッサージをしてやったりの様子もほほ笑ましく、つついっ普通の家庭での力関係を想像してみたりする。

実は二十数年前、たった一度だけ突然思いついて五キロに挑戦した事がある。何の準備も知識も経験もなく、ただ「何とかなるさ」と思ってやってみて、こっぴどくやっつけられた。何せその時は、小学生の徒競走と同じようにマラソンも爪先で走るものだろうと思っていたのだから。血豆をつくり足をひきずりながらゴールに着いた時、係の人達は後仕舞をしている最中だった。机を片付けていた係員が、「あれ、まだいたの？」って顔付きで私を眺めたのを今でも覚えている。

だからといって、かつての私を彷彿とさせてくれるような、くたびれ果てた人を見たくはない。つまりはスタート前のあのはしゃぎっぷりが面白くてのマラソン見物で、走っている姿に関心がないのかもしれない。